

園番号 710

令和7年度 奈良市立高円こども園 研究実践概要

園長名 岡本 和美
全園児数 90名

1. 研究主題

『『おもしろい』『またやりたい』と心動かし、意欲的に遊ぶ子どもを目指して』
～援助の工夫から子どもが心を動かす瞬間を捉える～

2. 研究年度 3年度

3. 研究主題設定理由

2年間の取り組みから、環境構成や援助の大切さについて再確認した。これらを加味して、子どもの実態に即した環境構成と保育者の援助の在り方が、子どもの心の動きにどのように作用しているのかを研究することで、より意欲的に遊ぶ子どもの姿につながるのではないかと考えた。

また見取る中でも、意欲的に遊んでいる時は、大きな子どもの心の動きがあると仮定し、子どもの姿や興味関心だけでなく、心を動かす瞬間（惹きつけられた事象、動いた要因など）や、その時の環境と関わりに着目していくことにした。

4. 具体的な研究内容

①研究のねらい

子どもの心が動いた瞬間を捉え、見取りを深めることで、より遊び込める環境構成や援助のあり方を見出し、意欲的に遊べるようにする。

②研究の重点

- ・子どもが自ら考え、興味をもったことに意欲的に遊んでいる姿から、子どもの興味・関心を見取り、必要な環境を再構成しながら、子どもが満足するまで遊び込む経験や達成感につながる経験を積み重ねられるように取り組む。
- ・子どもが興味・関心をもっていることや、子どもの実態から環境を整え、自らやってみようという意欲的に遊ぶ子どもを育成する。
- ・園内研修やカリキュラム会議、でいあシート等の読み解きを通して、職員間で子どもの育ちや発達の繋がりを共通認識したり、子どもが心を動かす瞬間を捉え分析したりすることで、一人一人に寄り添い関わり、保育内容を工夫して実践する。

③活動の方法

今年度は、子どもの心が動いている瞬間とはどんな時か、子どもの心の動きを捉えることに着目し、読み解きを通して様々な意見を出し合うことにした。事例の読み解き方法や子どもの心の動きに対する捉え方が変わっていったため、抜粋した事例は、読み解きをした順番で掲載する。

- ・4歳児の事例は、遊びがひと段落し、担任が事例と振り返りをまとめてから読み解いた。
- ・3歳児の事例は、遊びが盛り上がったすぐ後に、写真を見ながら読み解いた。
- ・0歳児の事例は、遊びの準備段階から、実際に遊んでいる場所へ行って読み解いた。

下線は___:子どもの心が動いたと考えられる瞬間 ~~~~~:援助や環境構成の工夫 とする。

4歳児 「めっちゃきれい！」 9月

懐中電灯や太陽の光遊びを楽しんだ後に、映画館づくりが始まった。保育室の電気を消してもあまり暗くはならず、子ども達の中から「もっと映画館って広くて暗いねんで」という声があがった。どうしたらもっと暗くなるかを、子ども達を中心に考えられるように促し、保育者も側につきながら、さりげなくこれまで子ども達が扱ったことのない脚立や大きめの布、段ボールなどを豊富に用意したりした。大きめの布などは、一人では持ちにくかったので「こっち持って」などと友達と声を掛け合うようになった。そして「顔見えへんやん」と声上がるほどの空間をつくり上げた。これまでの遊びを思い出し、懐中電灯でカラーセロファンやペンで色を塗ったプリンカップを急いで持ってきて光らせると、暗い空間をつくりあげたことで「めっちゃきれい！」とこれまでよりも綺麗に光ることを感じていた。



〈担任の振り返り〉子ども達にとって扱いが難しい大きな道具も準備したため、保育者の手が必要だと思ったが、すぐには手伝わず、危険のないように見守りながら、子ども達に任せたことで、自然と友達と協力する姿や自分達でできた満足感につながり、子ども達が主体的に遊びを進める姿が見られた。子ども達の「めっちゃきれい！」に大いに共感したり、悩んだ時には保育者も一緒に考えたりしてきたことで、映画館ができた時には達成感を強く感じる姿が見られた。

〈読み解きと考察〉



この事例では、これまでの遊びの気付きや経験が活かされて、保育者や友達と一緒に、次の遊びへと発展していった事例として〈担任の振り返り〉と共に、読み解いた。子どもが心を動かした部分はどこなのかという所に焦点が当たり「めっちゃきれい！」と言った場面だけでなく、“映画館として真っ暗な空間をつくりあげることができた時”、“もっと暗くしたいという思いを見せた時”など、様々な意見が出た。このことから、1つの事例の中で、心が動いた瞬間が、いくつも読み取れることに気が付いた。表出した場面を頼りに、心が動いたその理由を考えることで、援助の工夫について深めることができるということにも気が付いた。保育者がいかに子どもの気付きや発見を見逃さず、瞬間を捉えてさりげない援助をするかが、子どもの意欲につながると考えられる。

3歳児 「はっぱシールや！」 11月

園庭のごちそうコーナーではドングリや落ち葉などの秋の自然物を遊びに使って楽しんでいる。落ち葉を細かくちぎり、スープをつくっていたA児。手に葉っぱが落ち、手をひらひらさせていた。「先生、はっぱ落ちひんで」と言って保育者に見せに来た。「わぁ！なんで！」と保育者が驚くと、「はっぱシールや！」と言って顔を赤くさせて言った。「やってみたいな」と保育者が言うと、ちぎった葉っぱを保育者の手に乗せ「こうやってやるねん」と手をヒラヒラさせて見せた。保育者もその通りにヒラヒラさせると、葉っぱは落ちた。すると、水に濡れたスポンジを持ち、手にポンポンと当てて、ちぎった葉っぱを乗せた。「こうや」と言ってほほ笑んだ。



遊びの振り返り時に集まると、手にはっぱシールをつけたまま椅子に座り、みんなに「はっぱシールしました」と話した。「面白いこと見つけたんだよね。教えてくれる？」と保育者が言

うと、友達のところに行き「こうするねん」と言って葉っぱを乗せた。たまたま濡れていた葉っぱは落ちなかったが、乾いていた葉っぱは落ちた。それを見ると「あ、あれあれ」と言ってバケツ（スポンジが入っている）を持ち出し、スポンジを手にあてて、葉っぱを乗せた。「ひつついた」と友達が言う嬉しそうに笑った。

〈読み解きと考察〉

この事例では、読み解きを通して援助や環境構成を変えていけるよう、遊びを見取ったすぐ後に、写真から読み解きを行った。保育者が子どもの気持ちに共感することに留めたことで、子どもが発見したことなどを自分の言葉で伝えようとしたり、聞いてもらったりする喜びを感じることができ、子どもが『またやりたい』と、より意欲的に遊ぶ姿につながったと考えられる。また、子どもの心の動きを見ることで、その後の遊びの展開を予想し、環境構成について“葉っぱを貼れる場所を増やすためにビニールシートを用意する”、“さらに試すことができるように様々な種類の葉っぱなどを準備する”という案が出た。そこからA児は乾いたものと濡れたものの違いに気付き、水性ペンでの転写や、氷に砂をまぶすなど、遊びを広げていった。さらに、保育者が振り返りを通して、他児と遊びを共有する機会を設けたことで、普段振り返りに参加することが少なかったA児が参加でき、さらにその後友達が意欲的に遊ぶ姿にもつながったと考えられる。この事例の読み解きでは、子どもの心の動きの方向性を捉え、援助や環境構成を子どもの思いに沿って再構築することで、その後の遊びの展開につながっていくと実感した。

0歳児 「ジャジャー」 12月

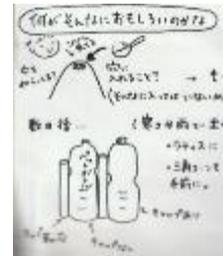
0歳児も心を動かして遊んでおり、“その時”には、ひとところに留まって遊んだり声を出して遊ぶ姿があるのではないかと考え、遊びの環境を再構築してみた。そして主に探索活動を楽しんでいたB児が、珍しく足を止め、砂遊びに出会った瞬間を捉えた。

B児が、いつもと違う場所に置かれたカラーコーンに目を向けた。B児はコーンの周りをぐるっと回って、おもむろにスコップで砂をすくい、てっぺんからコーンにかけた。するとB児の表情はパッと明るくなり、保育者を見て「ワハハ」と声を出して笑った。“コーンに砂をかけて笑う”ことを繰り返し楽しんだ。

《事例を共有し、話し合う》

心が動いていると感じた場面から、どこが面白いと思っているかを話し合い、カラーコーンの穴に砂を入れることが楽しいのではないかと考えた。

そこで、砂を入れやすくするために、カラーコーンを砂の入ったタライの近くに配置した。すくいやすいように砂の入ったタライを台の上に置き、カラーコーン以外にラップの芯やペットボトルも用意して、入れる遊びが楽しみやすいようにすることにした。



B児は、新しい環境に気付きながらも、カラーコーンの所に行き「あつ」と声を漏らし、スコップを手にとると砂をすくいコーンにかけた。砂がコーンを滑り落ちる瞬間、B児は「ジャジャー！」と声をあげ、その後も2～3回砂をかけては「ジャジャー」と言って保育者と目を合わせ嬉しそうに表情を見せた。

《実際に遊んでいる場所での、現場検証型読み解きを行う》

新しい道具に気付くが、触れなかったことから、穴に入れるのではなく、コーンのふちを砂が滑り落ちる音が楽しかったのかもしれないという意見が出た。また実際に職員も試してみると、カラーコーンを滑り落ちる音が想像より大きく「ジャジャー」の楽しさを感じられた。

そこで、扱いやすい道具、物の配置、目的に合った物選び（小さいスコップなど）を検討し、音を楽しめるようにした。



砂が滑り落ちやすそうなスチレンボードと、パラパラと音がしそうなアルミのトレーを用意しておいた。保育者がスチレンボードに少しずつ砂を落としてみると、B児は、スチレンボードを「バン！バン！」とスコップで叩いた。振動で砂が跳ねながら落ちた。砂がなくなり、保育者が砂を乗せると、また「バンバン！」と叩いた。保育者が少し動きを止めると、B児は保育者を見ながら「ん！ん！」と砂を乗せるよう訴えた。



〈読み解きと考察〉

“面白いと思っていることはどんなことか”を考えた時、“音、衝撃、砂が跳ねる、砂が落ちてなくなっていくこと”、“保育者が砂を乗せる、その砂を自分が落とす一連のやりとり”ではないかという意見が出た。次に、なぜそうなったのかを話し合った。スチレンボードの材質が良かったのではないかと、また砂が落ちる時にも叩いても音がすることが良いのではないかと、柔らかくたわむので砂がよく跳ねたことが関わっているのではないかと考えた。

この事例の読み解きでは、子どもの一瞬のきっかけを多角的に見ることができた。現場に行ったことで、言語化されていないところもイメージし、より子どもの思いに寄り添い、環境を再構築していくことができた。そして、0歳児保育では、子どもが楽しいと思ったことを保育者が表情や声、仕草、反応などから捉え、子どもの気持ちに寄り添い、共有することの繰り返しが、子どもの『おもしろい』『もう1回』といった意欲を育てるのだと確認した。



5. 研究の成果

今年度は、でいあシートや事例の読み解きを通して、職員間で子どもの育ちや発達繋がりについて共通認識を図るとともに、子どもが心を動かす瞬間を捉えて分析し、一人一人に寄り添った関わりや保育内容の工夫を実践することに努めた。読み解きの方法も、文章にまとめた事例を読んだり、写真や動画から読み解いたり、実際に遊んでいる場所まで行って話をしたりと、様々な方法を試してみた。

読み解きを通しての成果として、職員一人一人の遊びや研究主題に対する意識が高まった。また、心を動かす瞬間を捉えようとしたが、読み解きを通して、子どもの心は連続的に動いており、瞬間的な捉え方ではなく、経過を追った読み解きが重要であると気付いた。さらに、心が動くほど遊びに没頭し、継続していくことにつながると考えた。そして、子どもの心の動きを捉えた上での適切な援助が、さらに遊び込む姿につながるという結果に至った。

6. 今後の課題

日頃の保育の中で話し合いの習慣を積み重ね、共通理解をもって取り組むことで、多様な視点やアイデアが生まれ、保育の質の向上につながると感じた。また、読み解きの方法として、複数の手法を検討したが、写真を用いた読み解きや、実際に遊びの場で行う読み解きは、職員間の話し合いが活発になり、意見が広がる傾向が見られた。引き続き、職員間で読み解きの機会を継続的に積み重ねることで、子どもの心の動きを捉える力や読み解く力の向上を図っていききたい。一方で、ビデオによる読み解きは、撮影のタイミング等の課題があった。他にも、一つの遊びに焦点を当てた園内研修の実施についても検討した。これらのことから、今後はより多くの職員が参加できる方法や、子どもの心の動きをより捉えられる読み解き方法を模索していききたい。